えんちょう通信

No.１１４
令和 5年 12月 11日
福島市立清水幼稚園
発行者　佐藤 一男

「この段差、どうしよう・・・」

１２月７日(木)、暦の上では「大雪」ということですが、風もなく、園庭は柔らかな陽ざしに包まれています。年少組の子どもたちはみんなで、ままごとや砂遊びをしています。

スコップで穴を掘って池を作ったり、砂を集めて山を作ったりしています。砂でプリンやケーキを作ってテーブルに並べている子もいます。何でも作れる砂場が子どもたちは大好きです。

しばらく遊んだころ、誰かが自由遊びの終わりの時間に気がついて、「かたづけの時間だよ！」と、みんなに声をかけました。すると子どもたちはそれぞれ、自分が使ったおもちゃや道具の片づけを始めました。スプーンや皿、カップなどを大きなワゴンに入れて、みんなで物置まで押していきます。スコップやテーブルを片づけている子もいます。

そんななか、男の子が一人で手押し車を片づけ始めました。砂場から手押し車をコロコロ転がして、物置まで来ました。そして地面より一段高くなった物置の床にその手押し車を入れようとしています。

ところが鉄でできた手押し車ですから、子どもにとってはなかなか重く、そして物置の床は地面より一段高くなっているので、うまく中に入れることができません。

後ろで優しく見守る先生が「がんばれー」と応援してくれます。その声に励まされて、男の子は何とかして物置の床まで手押し車を入れようと一生懸命押しますが、やっぱり床の上にはのぼれません。でもその子は、あきらめませんでした。怒ったり、投げ出したりしないで、その子は何とかしようと一生懸命考えています。「がんばれー」とまた先生の応援する声が聞こえます。

そして次の瞬間、その子は「押す」のをやめて、すっと手押し車の前に行って、手押し車を「引っぱる」ことにしました。

「押す」ことにいつまでもこだわったりせず、考えをかえて、「引く」ことにしたのです。そしてみごとに段差を越えて、手押し車を物置に片付けることに成功しました。まだ生まれて４年か５年くらいしか経っていない子が、こういうことができるのです。それも誰かに教えてもらったり助けてもらったりしたわけではありません。自分一人で考えてやり遂げたのです。

このように、子どもは自分で世界に働きかけ、次々に課題を解決していきます。子どもは決して大人にお世話をされたり、指示されて行動したりするだけの「受け身の存在」ではありません。自ら世界に働きかけて、世界を広げていきます。未来を拓くのは目の前にいる「この子どもたち」なのだと強く思いました。